

## 横川顕正遺稿集

### 一 郷正道 (教授・仏教学)

『横川顕正遺稿集』が、ご息女の編集のもと、旧臘、丸善出版サービスセンターから出版された。故横川顕正教授は、本学図書館にある「横川文庫」(和漢書822冊、洋書358冊を蔵する)のご当人である。教授は、あの鈴木大拙博士の後継者として嘱望され、教授が病気に倒れると病室に布団を持ち込んで必死に看病され、葬儀の折には「横川君、何故早く死んだ」と泣き叫ばれたほどの逸材であったが、36才で天逝された方である。

遺稿集出版の意義は次の二点にあるといえよう。第一は、現在の如き世界的名声を得る以前の、従来、知られてこなかった大拙像を、没後40年を迎える今、世に紹介することになったことである。その大拙像は、奇しくも本遺稿集の編集も終わりに近づいたとき松ヶ岡文庫から発見された、故教授夫妻と大拙先生との間でかわされた書簡に基づく。その書簡の内容はきわめて confidential なものであり、それらの公開を決意された編集者の勇断に敬意を表したい。

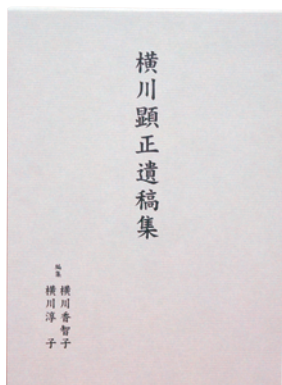
1921年(大拙51才)から約20年間の大谷大学での教鞭生活は、佐々木月樵、西田幾多郎



とのつながり、慇懃によるものであったが、その間の大拙像は、数少ない学徒によって思ひ出話としては伝えられることはあるものの未知の部分が多い。それにくらべ、本遺稿集には当時の書簡が収められており、資料にもとづき客観的に大拙像がきわめてリアルに偲ばれるのである。遺稿集は一般的には私的なものであるかもしれないが、未知の大拙像を明らかにすることになった点で、本遺稿集は、大変貴重な資料を提供し、公的な貢献をなす出版になったといえる。

故教授から大拙先生宛の書簡は、偏依大拙の一学徒が真摯に学問上の教示を仰ぐものが大半である。圧巻は教授のご令室からのもので、拝読して感涙にむせぶのは決して私一人ではなかろう。教授が急逝され、幼子5人(1人は胎内)をかかえて帰寺した若坊守の苦悩が赤裸々につづられ、それを受けて大拙先生が親代わりになってお世話された様子が判明する。大拙先生の御教導によって若坊守は得度され、故教授の自坊の法灯の継承が可能になった事実が証言されている。

1920年代の大拙先生は決して今ほど世界的名声を得た存在ではなかったと思う。その先生を、学問上の、人生上の師と仰いだ故教授



の慧眼。その学生を受けいれ、手塩にかけ、天逝後のご家庭の面倒まで親代わりになって世話された大拙先生の慈愛。かかる故教授との師弟関係に、これまで知られていない大拙の暖かい人間像の一面を公に知ることになった。

第二は、戦雲垂れこめ人口に膾炙されるに至らなかった論文—和文(新刊紹介を含む)32篇、英文(編著、翻訳を含む)7篇—が、戦後60年を経、あらためて日の目を見ることになった点である。それらは23才から36才までのいわば学究生活に入りたての頃の業績であるが、その内容もさることながら、その多作には大学の末席をけがしている小生など汗顔の至りである。かかる勉強のしすぎが、健康を蝕むことになったにちがいない。

故教授のご専門は宗教学で、その強靱な思索力、堪能な語学力、研究領域の広さに驚嘆する。主たる研究テーマは神秘主義であった。

愛弟子の故坂本弘教授は、「宗教的神秘主義の基本的概念」を教授の宗教学者としてのデビュー作と位置づけている。その解説によれば、故教授は古代キリスト教の神学者であるアウグスティヌスこそが神秘主義の本質を解明する典型的な事例と考えておられた。そのアウグスティヌスの研究を通し、「神秘主義は、『一』の直観もしくは直接的経験であり、『ゼロ』の経験を通しての覚触である」(本書40頁)と示唆に富む見解を表明されている。「一」は「神」なる言葉の代置であると著者自身註釈され、さらに「ゼロ」は仏教の空(sūnyatā)のことであろう。神秘主義の理解をキリスト教の伝統の中だけにとどめず、仏教との対比において考察されようとしておられたことがうかがえる。因みに、別の論文では、神秘主義とは「安心」と指摘されている(本書161頁)。これこそ、大拙先生からの教示であろうが、比較宗教学の貴重な視点をすでに持ち合わせておられたことを知ること

ができる。

さらに、「近代仏蘭西神秘家の特異相—マルタンの『還来』的預言に就いて—」では、24才で昇天した聖女テレーズ・マルタンを扱っている。それは、マルタンの此土還来の預言—キリスト教では欠除された見解—に真宗の還相廻向との類同性を見ておられる(本書186頁)。神秘主義と浄土真宗の接点として還相廻向の見解を見出しておられたようである。神秘主義と禅とのかかわりを述べる論文は多々あろうが、真宗教学にまで言及されるのは教授ならではのと思う。さらに、死を予感しておられたのか、絶筆ともいえる「死と佛教」の末尾(本書217頁)に、「斯くてこそ死に涼風を吹き入れ、死をして徒らに生を毀損せしめず、照るもよし曇ってもよしと心に餘裕を生じてくるのである」と諦観の心境を述べ、臨終の際には大拙先生に「必死の面持で『必ず生まれかわって御恩返しをします』と繰り返し訴え」られたそうである(本書371頁)。

真宗の伝統の中に育ち、大拙先生の薫陶を受け、豊かな語学力で西洋の文献に通じた若き俊英の天逝は、本学のみならず日本の、世界の学界にとって、いかに惜しみてあまりあるものであったかを、門外漢の小生にも痛感させる数々の論放が収められている。

本遺稿集は、私的領域をこえ公的性格を担い、知と情が巧にかみあった編集になっている。